

徳川美術館

尾張徳川家の至宝

徳川美術館 学芸部 加藤啓子



1 はじめに

かつての尾張徳川家名古屋別邸(大曾根邸)の表門、通称「黒門」をくぐると、緑に囲まれた石畳の向こうに、徳川美術館の玄関が見えてきます。公園と美術館とが一体となったゆったりとした雰囲気は、そのまま館内へと続いてゆきます。館内では日本文化の伝統のかおりに浸ることが出来ます。

徳川美術館は隣接する池泉回遊式の日本庭園「徳川園」や尾張徳川家旧蔵書を収蔵する「名古屋市蓬左文庫」と共に、近世武家文化を体感できる歴史文化拠点です。



徳川美術館の玄関

2 徳川美術館の歩み

2.1 徳川美術館とは

徳川美術館は、江戸時代の大名家・尾張徳川家に伝えられた重宝、いわゆる「大名道具」を収蔵する美術館です。尾張徳川家19代当主徳川義親^{よしちか}によって昭和6年(1931)に設立された財団法人尾張徳川黎明会^{れいめいかい}(現・公益財団法人徳川黎明会)が運営する私立美術館で、昭和10年に開館しました。

徳川美術館は尾張徳川家の重宝のほかに、明治維新後は徳川宗家(将軍家)や紀伊徳川家など大名家の売り立て品を購入したり、また岡谷家や高松家など多くの篤志家からの寄贈品が収められて、さらに充実し、戦中戦後の災難混乱を免れて現在に至っています。昭和62年(1987)秋には開館50周年を記念して実施された増改築工事が完成しました。名品コレクション展示室が加わることによって、より一層充実した展示をご覧いただけるようになりました。

収蔵品は徳川家康の遺品をはじめ、初代義直(家康9男)以降の尾張徳川家の歴代当主やその家族らの遺愛品を中心に、総数およそ1万件余りにおよびます。世界的



竣工当時の美術館本館と収蔵庫 昭和10年9月撮影

にも有名な国宝「源氏物語絵巻」をはじめ国宝9件、重要文化財59件、重要美術品46件を含み、徳川美術館ならではの種類の豊富さ、質の高さ、そして保存状態の良さを誇っています。明治維新や第二次世界大戦の戦災などによって、多くの大名家の伝来品が喪失・散逸してしまった今日、徳川美術館の収蔵品は大名家のコレクションとして唯一まとまった存在です。また尾張徳川家の記録や文書類を収める研究機関・徳川林政史研究所を姉妹機関にもつ点でも、他に例を見ない美術館です。



尾張徳川家19代 義親

2.2 尾張徳川家について



徳川家康画像(東照大権現像)

尾張徳川家は、江戸時代に創設された大名家です。徳川将軍家に連なる御三家の筆頭格で、諸大名の中でも最高の格式(家格)を誇っていました。

初代は徳川家康の9男義直^{よしなお}(1600～50)です。義直は慶長12年(1607)、父・家康の命で尾張国(現在の愛知県西部)の大名となり、名古屋城を居城としました。61万9500石の石高を領し、尾張国や美濃国の一部などを領地としていました。御三家の重要な役割として、徳川将軍家に跡継ぎが無い時には、尾張徳川家は紀伊徳川家とともに将軍後継者を出す資格がありましたが、尾張徳川家からは将軍を出すことはありませんでした。

初代義直は学問を好み、儒教に傾倒して文治政策を推し進め、2代光友^{みつとも}(1625～1700)以降の歴代当主もまた、学問に励みました。7代宗春(1696～1764)は、8代将軍吉宗がかかげる質素倹約政策に反して積極的な



尾張徳川家初代義直

自由放任政策をとり、城下町名古屋に繁栄をもたらした結果、「芸どころ」名古屋と呼ばれるきっかけを作りました。

7代宗春が8代將軍吉宗の命で隠居謹慎を命ぜられたあと、8代宗勝(1705～61)が分家の高須松平家から尾張徳川家に入り家督を継ぎました。宗春の治世の放漫財政と風紀の乱れを一掃し、人心の刷新をはかった宗勝の政治改革は、9代宗睦(1733～99)へと継承され、その後尾張徳川家は、將軍家や御三卿から養子を迎えながら、幕末へと向かいました。

幕末維新期の尾張徳川家のかじ取りを担ったのが、分家の高須松平家出身で尾張徳川家の家督を相続した14代慶勝(1824～83)でした。慶勝は將軍繼嗣や外交問題で時の大老・井伊直弼と衝突して隠居謹慎を命ぜられ、慶勝の弟・茂徳(1831～84)が尾張徳川家の家督を継いで15代となりました。慶勝も謹慎解除後は復権し、年少の14代將軍家茂を補佐しました。15代將軍慶喜が大政奉還した慶応3年(1867)当時、尾張徳川家は慶勝の子の16代義宜(1858～75)が当主で、慶勝は隠居ながらも義宜を後見する立場にあり、尾張徳川家の舵取りを担いました。

明治8年(1875)、16代義宜の早世により、慶勝は再び当主となり、高松松平家より義礼(後の尾張徳川家18代 1863～1908)を迎えました。その後、越前松平家から迎えられたのが19代義親(1886～1976)でした。

義親は、歴史学者・生物学者であったと同時に、政治家・事業家としても盛んに活動しました。その一方で伝来の美術品の保全を図るため、昭和6年(1931)財団法人尾張徳川黎明会を設立、同10年名古屋別邸(大曾根邸)の跡地に美術館を建設し、尾張徳川家伝来の宝物の公開を始めました。徳川美術館の開館です。義親の後は20代義知(1911～92)・21代義宣(1933～2005)が継ぎ、現在22代義崇(1961～)が美術館の館長を務めています。

2.3 徳川家康の遺産

徳川家康は、元和2年(1616)に駿府城(静岡市)で75歳の生涯を閉じました。駿府城に残されていた莫大な金銀財宝や諸道具類の大半が九男の義直(尾張徳川家初代)、十男の頼宣(駿河徳川家、のち紀伊徳川家初代)、十一男の頼房(水戸徳川家初代)の三家に分与されました。これらは「駿府御分物」と呼ばれています。この折の遺産分与目録が『駿府御分物御道具帳』です。その内容は、金銀の道具をはじめ刀剣・武具・甲冑・茶道具・香道具・能道具・衣服・調度・薬・香木など多種多彩です。

徳川美術館には、この『駿府御分物道具帳』をはじめ、江戸時代初期から幕末・明治時代に至るまでの尾張徳川家の道具帳・蔵帳が500冊以上伝えています。これらの道具帳に記載されている刀剣や茶道具・書画などの多くが徳川美術館に現存していて、誰が用いていたのか、何時どのような経緯で尾張徳川家にもたらされたのかが判明する作品も少なくありません。作品が伝来した系譜をたどることができるのも、徳川美術館の収蔵品の大きな特色です。



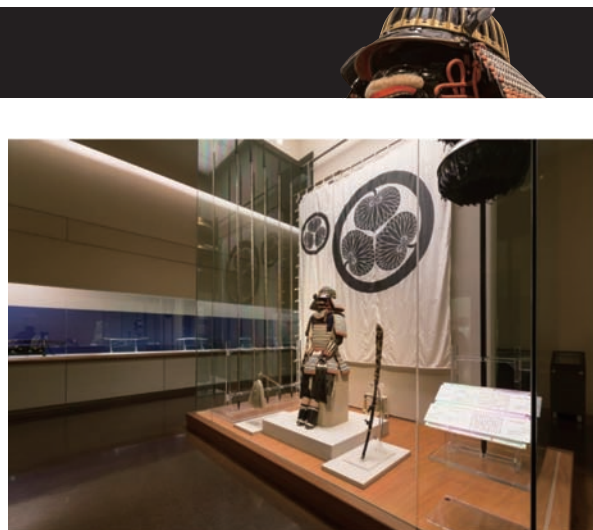
尾張家本『駿府御分物御道具帳』

3 展示室紹介

大名の生活と文化を紹介する名品コレクション展示室(第1～6展示室)では、尾張徳川家当主の生活の場であった名古屋城二之丸御殿を、時代考証に基づいて部分的に復元しています。美術品とそれらが使われた空間との一体的な体系展示によって、美術品単体の美にとどまらず、日本の伝統的な「構成の美」「取り合わせの美」を鑑賞することができます。

3.1 第一展示室「武家のシンボル 武具・刀剣」

名古屋城の城門をかたどった扉をくぐると、正面に名



第1展示室

古屋城二之丸御殿の御夜居^{おんよいのま}の間で毎年正月11日に行われた「具足始め」の飾り付けが再現されています。「具足始め」とは甲冑を飾り、その年の武運を祈願する尾張徳川家の年中行事です。そこでは甲冑や太刀・旗幟^{はたのぼり}・馬標^{うまいしるし}などが組み合わせて飾り付けられ、武士が武器・武具に対して抱いていた尊崇の念や、武家の故実^{こじつ}が偲^{おも}えるようになっています。

また周囲のケースには、太刀や刀などの刀剣類や精巧な刀装具・弓矢や火縄銃・鷹狩りの道具など、大名家にふさわしい品々が展示されています。

<具足飾り>

大名の甲冑は、一軍を指揮する大将の威厳を示す着用品です。武家の長としての威厳と品格に満ち、贅^{ぜい}を尽くし技術の粋を集めて、はた目にも美しく見えるように作られました。

甲冑の向かって右手には「馬標」が掲げられています。「馬標」は、陣中や戦場において、大将の居所を示すしるしでした。また甲冑の後ろに掲げられた葵紋付きの大きな旗は「馬標」と同じ役目があり、「纏^{まと}い」と呼ばれています。



具足飾り

<刀剣コレクション>

大名は、言うまでもなく武士であり、その集団の長でしたから、泰平の世の江戸時代にあっても、常に軍備を怠^{おろそ}ってはなりません。しかし、大名家の武器武具類は、戦闘時に際しての実用品であるだけでなく、同時に「武士の心根」を表すために、美しく気品に満ちていることが必要とされました。なかでも刀剣は「武士の魂」と言われる通り、武士の精神の象徴として大切にされ、最も高い格式を持ち、公式の贈答品の筆頭ともされました。

徳川美術館の刀剣のコレクションは、質・量ともに日本で、長刀・槍・小刀を含めると約1,000点が収蔵されています。このうち国宝に指定されている刀剣は10振（一括指定を含む）、重要文化財が19振、重要美術品が23振、名物刀剣も23振にのぼっています。これらの刀剣は、武器としてではなく宝物として大切に扱われ、大名家では贈り物としても使われました。中には、織田信長・豊臣

秀吉・徳川家康といった戦国時代の名将たちが持っていた刀もあります。



国宝 短刀 無銘 正宗 名物 庖丁正宗

3.2 第2展示室「大名の数寄 茶の湯」

第2展示室では静寂の世界「茶の湯」の場が再現されています。室町時代に成立した茶の湯は、江戸時代になると「御数寄屋^{おすきや}」の接待として武家の格式を示す重要な行事になりました。

大名は、邸内に茶室を設け、将軍が大名家を訪問する儀式である「御成」をはじめさまざまな晴の行事や、私的に諸大名を招いての接待の場として用いました。

さらに、名古屋城二之丸御殿にあった「猿面茶室^{さるめんちやしつ}」を復元し、そこに一国一城にもあたとされた「名物」の道具をはじめ、数々の道具を配置して、大名の茶の湯の世界を鑑賞・理解できるように展示しています。



第2展示室

<茶の湯について>

抹茶は茶葉を石臼で挽いた粉末です。その抹茶を飲むためには、伝統的な作法がありました。これを「茶の湯」といいます。「茶の湯」は、今から500年ほど前の室町時代に形式が整い、武士にとっては大切なたしなみ、教養の一つとなりました。室町時代の足利將軍家や大名たちは、唐物と呼ばれる中国から輸入された高価な茶碗や茶入などの道具を珍重し使用しました。

これに対し、桃山時代、千利休らによって質素を重んじる「侘びの茶の湯」が流行するようになると、和物や朝鮮半島製の一見地味で簡素な美意識に基づく道具が好まれるようになりました。「茶の湯」に用いられる茶碗や茶

入・釜などの道具は大事にされ、信長や秀吉・家康もたくさんさんの茶の湯道具を持っていました。



御数寄道具置き合わせ

<猿面茶室>

猿面茶室は、もとは清須城にあり、のちに名古屋城二之丸に移築されました。「猿面」の名は、床柱の上部の面取り部分に一对ある節が猿の顔に似ているところから名付けられたとする逸話があります。京都山崎・妙喜庵の「待庵」、京都・建仁寺の「如庵」(現・愛知県犬山市へ移築)とともに日本の三名席の一つに数えられ、戦前は国宝に指定されていました。

明治維新後は名古屋城を離れ、最終的には名古屋市内の鶴舞公園に移築されていましたが、昭和20年(1945)の戦災によって焼失しました。この展示室に造られた茶室は、残されている図面をもとに忠実に再現しています。

3.3 第3展示室「大名の室礼 書院飾り」

黄金色に輝く広間は、名古屋城二之丸御殿にあった「広間・上段の間」です。

ここは大名が公務を行う場です。室内には、押板(床)・違棚・書院床という飾り付けの空間が設けられ、そこには武家の故実^{おしいた}に則って、書画や香道具・文房具など各種の道具が飾られました。

それらは中国からもたらされた「唐物」と呼ばれた品々が中心でしたが、それらをとりどりに組み合わせたり、調和の美を創りだしたのは、武家社会の美意識や価値観でした。「上段の間」の向かい側^{くまり}に再現してあるのは、大名のくつろぎの場であった「鎖の間」で、絢爛豪華な「上段の間」とは対照的に、落ち着いた雰囲気^{つりがま}をかもし出しています。



第3展示室 書院飾り

<名古屋城 二之丸御殿>

尾張徳川家の居城であった名古屋城には、本丸御殿と二之丸御殿など数寄の御殿がありました。本丸御殿は将軍が上洛、すなわち京都へおもむく際にのみ使用され、日常政務は二之丸御殿で行われました。尾張藩士は二之丸御殿を「御城」と称しており、尾張徳川家の実質的な政庁でした。

廃藩置県後、本丸御殿は名古屋大本営(後に名古屋離宮)となって残されましたが、二之丸御殿は撤去され、現在では庭園のみがかつての面影を留め、国指定名勝となっています。



古写真 東鉄御門より二之丸御殿・天守
徳川慶勝(尾張家14代)撮影 徳川林政史研究所蔵

3.4 鎖の間

名古屋城二之丸御殿にあった、茶室と書院の中間に位置づけられる座敷です。北向きに火灯窓^{かどうまど}を設けた付書院のある三畳からなる御上段と、七畳の下段(復元は三畳分)からなっています。これに続く中^{かどうまど}の間には、壁貼付けの床が構えられ、炉が切られています。將軍家の使者である上使が訪れた際には、この部屋で茶が出されました。

鎖の間の名の由来は、諸説があってはつきりしませんが、書院と小座敷の中間に位置し、これらを繋ぐ「鎖」の役割を果たしていたためとも、天井から炉の上に鎖を吊って釜が掛けられるようにしてあったためとも言われています。この部屋では四季を通じて、釣釜^{つりがま}が用いられていました。



第3展示室 鎖の間

<作品紹介「盆石 銘 夢の浮橋」>

盆石中の王者として古来有名な盆石です。後醍醐天皇が笠置・吉野へ遷幸した際にも、常にこれを懐中にしていたと伝えられ、石底に朱漆で書かれた「夢の浮橋」の銘は、後醍醐天皇筆とされています。

銘の「夢の浮橋」は、『源氏物語』の最終巻である「夢浮橋」にちなんでいとみられます。

石は中国江蘇省江寧山の霊石と伝えられ、底面は一見密着しているように見えながら、両端の極めて僅かな部分が接するのみで大部分は浮き上り、しかも安定感の強さを感じさせています。中国・明時代の青銅製の器および鉄刀木の台が附属しています。

このような盆石の鑑賞は室町時代頃より盛行し、『小河御所并東山殿御銘図』にも「鉢石」「石鉢」と記され、書院床や違棚に飾られました。



盆石

3.5 第4展示室「武家の式楽 能」

総檜造りの舞台は、名古屋城二之丸御殿内の御広間前にあった表能舞台の再現です。

徳川幕府は、能を武家の式楽(公式の場での音楽)と定めたので、大名の御殿や前庭では必ず能舞台が設けられ、慶事や公式の行事の際には能が演じられました。

そして大名家には能役者たちが召し抱えられ、さまざまな演目に応えられるよう、面や装束・小道具類が備えられていました。



第4展示室 能舞台

<尾張徳川家の能面>

能には、観世・宝生・金春・金剛・喜多の流派があります。尾張徳川家では、初代義直以来金春流をシテ(主役)方として重用しましたが、3代綱誠は宝生流を金春流と同格に扱い、6代継友の時代に金剛流、10代斉朝の時代に観世流も重用したため、それぞれの流派にちなんだ能面が製作されました。

徳川美術館には、現在、尾張徳川家に伝えられた能面百126面、狂言面30面が保存されています。この中には、伝説的な能面の作者である日光や越智吉舟の作と伝えられる室町時代の面をはじめ、是閑吉満や友閑満庸、河内大掾家重など名人として名高い面打師達の作品が多く含まれており、尾張徳川家の能面コレクションの質の高さを示しています。



能面 白式尉

<能装束>

能装束とは、一般的には能を演じる人が、能面や太刀・扇などの道具以外の、身につけるさまざまな衣装を呼んでいます。演目や役柄によって一定の決まりがあります。

「唐織」は、能装束を代表する最も絢爛豪華な装束で、主として女役の表着として使用されます。若い女役に用いられる紅色の入った紅入と、中年以上の役柄に用いられる紅色のない紅無の区別があります。このほか、刺繍を施して文様を表し、女性役の腰巻や貴族・童子の着附に用いられる「縫箔」、金箔や銀箔を糊で貼り付け文様を表した「摺箔」、主として少年から老人までの男性の着附のほか、荒神・鬼畜の類の役や年配の女性の上着にも用いられる「厚板」、公達の鎧姿や優雅な舞を舞う女性役の表着に使用される「長絹」などがあります。

男性役では広袖で前後の身頃が離れ、前身はたくし上げて腰帯で結んで着付ける「狩衣」や、狩衣と同様に広袖で身頃が分かれ、前後の裾を幅6センチほどの共裂で繋いだ「法被」があり、いずれも単と袷があります。幾何学的な文様を織りだした金欄や緞子に裏生地をつけた「袷狩衣」は、大臣・神体・天狗・鬼などの威厳のある強い役に、紵や紗などの薄ものの裂地に金や銀の糸で文様を織り込んだ「単狩衣」は神主や老神に、また袷の法被は鬼畜・怨霊などの強い役柄や唐人、武将の鎧姿などに、単の法被は肩脱ぎの形で平家の公達の武装姿に用いられました。



紅・白段金霞枝垂れ桜に扇文唐織

<能道具>

能を演じるときには、能面をはじめ、唐織や長絹などの装束はもちろんのこと、演者が身につけたり手に持ったりする小道具や舞台装置なども必要です。

能で用いられる扇に中啓があります。「中啓」の「啓」は開くという意味で、たたんでも末が半開きになることからきた名称です。墨絵の図柄は僧・老人の役に、金地に桐・鳳凰の図柄は神体など役柄によって、また流派によって区別があります。また全体が閉じる通常の扇を「鎮扇」または「鎮折扇」と呼んでいます。鎮扇には厳密な決まりがなく、能・狂言ともに一部の主人公に当たるシテや囃子方・地謡・後見が用います。

扇のほか、「烏帽子」や冠などの被り物、太刀や剣、数珠や水桶、さらに大道具に用いられる裂類など、多種多様な曲目に応じた道具が用意されていました。

3.6 第5展示室「大名の雅び 奥道具」

第5展示室では、大名やその夫人達がプライベートな生活の場である「奥」で身のまわりを飾ったり、使用した道具、また教養を高めたり趣味や遊びに用いたりした「奥道具」を展示しています。どの作品をとっても、大名の華麗な生活や、たしなんだ教養を偲ばせてくれる道具ばかりです。また大名は、模範的な教養人であることが求められていました。そのために自らも漢籍やわが国の古典文

学を学び、詩や和歌を詠み、書を習い、絵を描くことが必須の教養とされました。



第5展示室

<千代姫の婚礼調度「初音の調度」>

「初音の調度」は、寛永16年(1639)9月、徳川3代将軍家光の長女千代姫(1637~98)が、数え年3歳で尾張徳川家2代光友に嫁いだ際に持参した調度類です。

『源氏物語』の「初音」の帖の「年月を 松にひかれて ふる人に 今日鶯の 初音きかせよ」の歌意を全体の意匠とし、その和歌の文字を絵柄の中に埋め込んだ調度類が47件、おなじく「胡蝶」の帖に語られる六条院の春の苑の光景をモチーフとした調度類が10件、このほか香道具類、長刀・刀剣・染織品などが10点余り伝えられており、現在一括して国宝に指定されています。

一日中見ていても見飽きないほどに、蒔絵(漆工芸の手法の一つ)の技法を駆使して製作されているところから、「日暮しの調度」とも呼ばれています。これらの調度類は、政治力・経済力の頂点にあった徳川幕府の権威を反映して、ひととき豪華で技術的にもわが国の蒔絵史上最高の作品と見なされています。



国宝 初音の調度

3.7 第6展示室「王朝の華 源氏物語絵巻」

国宝「源氏物語絵巻」は、紫式部が著した『源氏物語』を、12世紀前半に当時の宮廷で絵画化した現存最古の物語絵巻です。当初は、『源氏物語』全帖から場面を選び、美しく装飾された料紙に流麗な筆致で本文の一部を書写した詞書と、その内容を描写した絵とが交互につながっていました。『源氏物語』に語られた平安王朝の人々の雅

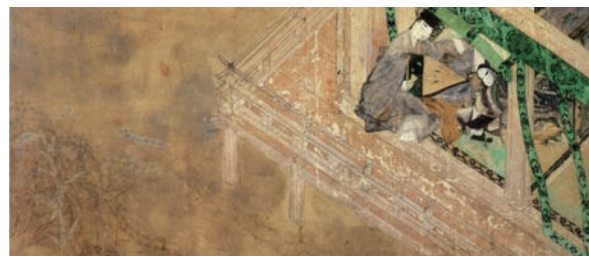
びな暮らしぶりのありさまを余すところなく今に伝えてくれる名品として著名です。

もとは相当巻数にのぼるセットであったと考えられますが、長い伝来の年月の中でその多くが失われ、徳川美術館には、尾張徳川家に伝来した3巻15場面分が収蔵され

ています。オリジナルの作品は保存のため、毎年11月の第3土曜日から第4日曜日までの一週間に限り、場面を変えつつ展示しています。また、徳川美術館の開館の周年（10年に一度）に全巻公開されます。



国宝 源氏物語絵巻 竹河(二)



国宝 源氏物語絵巻 宿木(三)

4 本館(第7・8・9展示室)

第7・8・9展示室は、昭和10年(1935)開館当時の展示室です。建築に当たり、建物の外観意匠を懸賞募集し、一等となった佐野時平の案を基に大江新太郎と、後に帝室博物館(現・東京国立博物館本館)を設計する渡辺仁が外観設計を行い、吉本与志雄が実施設計して、昭和7年(1932)に着工されました。施工は竹中工務店が担当しました。開館時には、自然光を電動回転式で調節する高窓や、二重壁の間に乾燥した空気を通して湿度を調節するしくみなど、近代的設備を備えた画期的な美術館として、ヨーロッパの建設界にも紹介されました。

昭和62年(1987)に内部の一部を改装、また、平成28年(2016)には耐震補強工事を行いました。この展示室では、年間を通じて美術史・歴史・文化史・民俗学などの観点に基づくさまざまな企画展を開催しています。なかでも、2月から開催される「尾張徳川家の雛まつり」展には毎年多くの来館者があり、親しまれています。

この建物は、南収蔵庫とともに城閣を思わせるような帝冠様式建築で、昭和初期のわが国の美術館建築を代表する建造物として、国の有形文化財に登録されています。



第7展示室



尾張徳川家の雛まつり展

5 名古屋市蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫は、尾張徳川家の旧蔵書を中心に、和漢の優れた古典籍を所蔵・公開している文庫です。初代義直が家康の遺産として譲り受けた「駿河御譲本」約3,000冊を中核として名古屋城内二之丸庭園内に「御文庫」を創立し、一代で約19,000点の蔵書を加えました。

以後歴代藩主が蒐集したり献上された書物などを含め、幕末には5万点を超える蔵書数を誇りました。

現在の収蔵品は、12世紀以降の日本や中国・朝鮮の古典籍のほか、17～19世紀の名古屋城図から世界地図や屋敷図・庭園図などの古絵図類、18・19世紀の蘭書など

の他に、明治から昭和に蒐集・寄贈を受けた本を含めて約11万点になっています。

昭和10年(1935)、徳川美術館が名古屋の地で開館すると同時に、蓬左文庫は財団所属の文庫として東京目白にある尾張徳川邸脇に開館しました。第二次世界大戦を経て、昭和25年(1950)に名古屋市に譲渡され、徳

川美術館に隣接する現在地で蔵書の管理と公開が行われています。平成16年(2004)秋の徳川園やその周辺の整備により、徳川美術館と名古屋市蓬左文庫とが渡り廊下でつながり、尾張徳川家伝来の大名道具を収蔵している徳川美術館と、蔵書類を収蔵している文庫とが一体となって展示を行うようになりました。



名古屋市蓬左文庫 エントランスホール



重要文化財 源氏物語(河内本) 名古屋市蓬左文庫蔵

6 徳川園

尾張徳川家2代光友が、元禄8年(1695)に自らの隠居所として造営した大曽根御屋敷を起源とする日本庭園です。かつては13万坪の広大な敷地を誇りましたが、光友歿後に取り壊され、尾張徳川家家老の成瀬・石河・渡辺三家の屋敷となりました。明治22年(1889)に再び尾張徳川家の邸宅となり、昭和6年(1931)に名古屋市に大部分が寄贈されて、翌年から一般公開されました。名古屋空襲で壊滅的な被害を受けたものの、平成13年(2001)より日本庭園として再整備し、平成16年(2004)に開園しました。

「龍仙湖」を中心とした池泉回遊式庭園で、瀟湘八景として名高い中国杭州の西湖にある人工堤・西湖堤を縮景として取り入れ、西側の湖畔には光友の諡号「瑞龍院」より名付けられた茶室「瑞龍亭」があります。東端の「大曽根の瀧」からの水流は、「虎の尾」と名付けられた溪谷を下り「虎仙橋」の下流で、「龍仙湖」にそそぐ変化に富んだ景観を作り出しています。

この庭園の見所は、「龍仙湖」南にある「龍門の瀧」です。この滝に使用されている切石と沢渡りなどの景石は、

かつて尾張徳川家江戸下屋敷「戸山荘」にあった「龍門の瀧」の遺構です。平成10年(1998)に早稲田大学構内で発掘調査された後、移築して徳川園内に再現しました。かつての「龍門の瀧」は、滝下にある沢渡りの飛び石を渡ると、急激に水量が増して飛び石が水没するという仕掛けが施されていました。現在でも水量を調節して、当時の趣向を再現しています。



徳川園 龍仙湖

7 おわりに

徳川美術館は「大名道具とは何か?」「近世大名とは何か?」という問いに答えることのできる我が国唯一の美術館です。江戸時代の大名文化と、日本が誇る歴史遺産を今に伝える中心的施設として、徳川美術館はあゆみを続

けています。

参考文献

徳川美術館ガイドブック(平成25年)